

平成30年度 矢掛町立矢掛中学校学校評価書

校長 妹尾 正巳

本校のミッション
今日より輝く明日のために
<ul style="list-style-type: none"> 目的をもって学校生活を送る 確かな学力を身につける

学級数	12	学級	児童(生徒・園児)数	285	人
職員数	25	人	家庭数	254	戸
学校関係者評価委員	田中 真秀 (学識経験者・川崎医療福祉大学) 高木 亮 (学識経験者・就実大学) 川上 公一 (学識経験者・前県立矢掛高等学校長) 前川 隆弘 (学識経験者・県立矢掛高等学校長) 藤原 立志 (地域住民・学識経験者・元小学校長) 岩崎 恭子 (地域住民・スクールサポーター) 古城賀津子 (地域住民・学校支援地域コーディネーター) 賀門 幸子 (保護者・矢掛中学校PTA会長) 三宅 晴久 (保護者)				

A 成果をあげている B ほぼ成果をあげている C あまり成果をあげていない D 成果をあげていない

領域	中期目標	単年度目標	具体的計画	達成基準	自己評価	評価
1	確かな学力	<ul style="list-style-type: none"> 学力向上を目指した授業改善を図る。 総合的な学習の時間を系統性のある取組にする。 	<ul style="list-style-type: none"> 各教科で、電子黒板や指導用デジタル教科書等のICTを活用した授業づくりに取り組む。 ペアやグループ活動で、仲間の意見を聞くとともに、自分の考えを述べられるように支援する。 3年間の系統的な取組で、課題設定力や課題追究力、情報活用能力、プレゼンテーション力を育む。 	<ul style="list-style-type: none"> 教員全員がICTを積極的に活用し、わかりやすい授業に努めている。 グループを中心とした活動を通して、85%以上の生徒が、仲間の意見をきちんと受け止め、自らの考えを進んで発表している。 「総合的な学習の時間」に、85%以上の生徒が、自ら設定した課題のもと、収集した情報を整理し、調べたことを聞く人に分かるように伝える(発表する)などの学習活動に積極的に取り組んでいる。 	<ul style="list-style-type: none"> 教員全員が電子黒板や教材提示装置などのICT機器を効果的に活用した授業に努めており、視覚的效果をいかしたわかりやすい授業展開をすることができている。 生徒の91%が授業は「わかりやすい」または「どちらかというわかりやすい」と回答しており、教員全員でわかりやすい授業について取り組んでいる成果とみられる。 生徒の98%が授業の中で、グループ活動をする場面が「ある」または「どちらかというある」と回答している。 教員は授業の中で、ペアやグループ活動をする場面を設定し、生徒が自分の意見を発表したり、友達の見聞を聞いたりする場面を増やすことができている。 3年生の全国学力学習状況調査では、79.0%の生徒が「生徒の間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思いますか」という設問に対して肯定的な回答をしている。また、70.0%の生徒が「1, 2年生のときに受けた授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していたと思いますか」という設問に対して肯定的な回答をしている。 総合的な学習については、矢掛プロジェクト(地域を学び、地域で学び、地域と共に)として、「課題設定」「調査・体験」「発表」と計画的に学習を進める中で、生徒は意欲的に活動できている。 	A
2	確かな学力	<ul style="list-style-type: none"> 基礎学力の定着と自学自習の充実を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 帰りの会でドリル学習(夕学)を行うことで、基礎学力の向上を図る。 生活ノートを活用し、家庭生活のプランニングを指導することで、学習習慣の定着を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 90%以上の生徒が、丁寧に課題やドリル学習に取り組んでいる。 80%以上の生徒が、1時間以上で十分な内容の家庭学習に取り組んでいる。 	<ul style="list-style-type: none"> 帰りの会でのドリル学習(夕学)には、全校生徒が同じ時間に落ち着いてきちんと取り組むことができている。 「家庭学習に毎日、1時間以上取り組んでいる」と66%の生徒が肯定的に回答している。 「子どもは、学校の宿題に家できちんと取り組んでいる」とかという保護者への設問では、88%の保護者が肯定的に回答している。 生徒の実感と保護者の子どもを覗く目に違いがあり、家庭学習において取り組み方や達成感・充実感のたせ方に改善・工夫の余地がみられる。 	C
3	支え合う生徒	<ul style="list-style-type: none"> 良好な学級の雰囲気づくりに努め、生徒の自己肯定感を高める。 	<ul style="list-style-type: none"> 学び合いを通して、共に繋がり居場所のある学級づくりに取り組む。 授業や学校行事を通して、考えを述べ合ったり、互いを認め合ったりする場面を設定する。 	<ul style="list-style-type: none"> 5月のQUアンケート結果よりも学級生活に満足している生徒が増えている。 85%以上の生徒が「意見を述べる場面があり、意見を認めてもらえている」と回答している。 	<ul style="list-style-type: none"> 5月と7月のQUアンケートにおいて満足している生徒は80%→79%(1年)、68%→71%(2年)、74%→74%(3年)であり、高い数値で横ばい傾向とみることができる。 QUアンケートでは、学級全体の傾向を知ると共に、生徒個々の内在する課題を細かに分析し、的確で細かな指導をしていくことが必要であると分析できる。 「授業の中で、グループ活動をする場面がある。」の項目では98%の生徒が肯定的な回答をしており、多くの授業で考えを述べ合い、話し合う授業が展開されている。 「授業の中では、自分の意見や考えを進んで発表している。」の項目では67%(昨年度より+7%)の生徒が肯定的な回答をしており、話し合う場面設定ができている。さらに、自由で柔軟な発言や活動が増えるように生徒の支援方法を工夫していく必要がある。 	B
4	支え合う生徒	<ul style="list-style-type: none"> いじめの未然防止に取り組むとともに、早期発見、100%解消を目指す。 	<ul style="list-style-type: none"> 未然防止のために、生徒の自己肯定感を高めるとともに、生徒の自主的な活動を支援する。 早期発見のために、アンケートや教育相談、生活ノート等、情報の集め方を工夫する。 	<ul style="list-style-type: none"> グッドビヘイビアチケットにより、生徒の自己肯定感が高まるだけでなく、生徒同士が相互に認め合い、居場所を実感しながら、安心して学校生活を送る。 生徒と教員との良好な関係により、いじめが発生しそうな前に、生徒から情報が入ってくる。 	<ul style="list-style-type: none"> 91%の生徒がグッドビヘイビアチケットをもらうことを肯定的にとらえている。 教師側も積極的にグッドビヘイビアチケットを活用できている。 「自分を頼りにしてくれる友人がいる」という設問に対し、91%の生徒が肯定的に解答している。 毎月月末には「困ったことアンケート」を実施し、年2回の教育相談と合わせ、生徒の現状把握について努力している。「困ったときに相談できる先生がいる」生徒は81%が肯定的であり、「困ったことや要望は、学校に相談しやすい」保護者は67%が肯定的である。 日々の教育活動でも積極的に生徒の様子を観察し、変化を見逃さないようにしていきたい。 	B
5	生徒の支援	<ul style="list-style-type: none"> 学校に適應しにくい生徒への支援を充実する。 	<ul style="list-style-type: none"> 不登校対策、小中連携の効果的な取組を行うとともに、SCやSSW、その他の外部機関との連携を一層密にする。 生徒指導上の課題を学校アドバイザーの活用や関係機関との連携を密に取りながら、落ち着いた学校づくりに取り組む。 グッドビヘイビアチケットを活用し、問題行動を未然に防止し、生徒と教職員の信頼関係を築き、生徒の自己肯定感を高める。 	<ul style="list-style-type: none"> 不適応傾向のある生徒について、専門家と連携して支援方針を定め、状況に応じ幅広く、他機関の援助を得ている。 生徒指導の方針を徹底し、学校アドバイザーや関係機関と連携をとり、生徒指導上の課題のある生徒に対応していく。 生徒全員が、グッドビヘイビアチケットをもらうとともに、お互いに交換し合えるように配慮する。 	<ul style="list-style-type: none"> 本年度14名の不登校の生徒を抱えており、その個々の生徒の状況に応じた支援をSS 3件、SC 3件、SSW 3件の協力を得ながら進めている。 三日連続で欠席になる生徒については、必ず連絡を取り家庭訪問を行っている。SSWや矢掛町保健福祉課、各小学校とも連絡を取りながら、できるだけ長期欠席を防ぐよう努力している。 いじめ対策委員会(7月、11月)を開き、外部関係機関や学校アドバイザーの意見を取り入れながら、より効果的な生徒指導・支援となるように努力している。 生徒個々の支援ノートを作成し、活用している。また、スクールカウンセラーやソーシャルワーカーにも積極的に活動していただいている。 グッドビヘイビアチケットは全体で1311枚生徒に手渡すことができている。 生徒間でもグッドビヘイビアチケットを渡す機会をつくり、友達からのよりよい行動の意識付けと強化をすすめることができている。 グッドビヘイビアチケットを活用し、生徒の自己肯定感を高めると共に、よい行いを奨励する雰囲気を作ることができている。 	B
6	生徒の支援	<ul style="list-style-type: none"> 特別支援教育の充実を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 特別支援コーディネーターを中心に教職員・支援員が連携を密にし、個々の専門性を高め個別の支援を充実させる。 関係機関、専門家、保護者と連携し、個別支援を充実する。 特別支援教育に関する校内研修を行い、専門性を高める。 	<ul style="list-style-type: none"> 特別な支援を要する生徒が安心して個性を發揮し、充実した学校生活を送っている。 学校、家庭、地域で共有した方針により、一貫して支援する。また、関係機関とも連携し、事例ごとに適切な方針により支援している。 特別支援教育に関する校内研修を研修計画の中に設定し、計画的に行っている。また、研修したことを全教員が実践している。 	<ul style="list-style-type: none"> 特別な支援を要する生徒が安心して学校生活を送れるよう支援できていると思われる。 95%の教員が支援を必要とする生徒に配慮した授業を心がけ、視覚支援など理解をうながす工夫を行っている。 特別支援学級の生徒については、本校コーディネーター、教育支援員の関わりによって、毎日の学校生活を充実して過ごすことができている。 各担任を中心に家庭訪問、保護者との連絡帳(特別支援学級のみ)、電話など、家庭との連絡を密に図っている。生徒個々に応じて、適切に関係諸機関との連絡をとりあい、方針を立てて支援することができている。 5月に特別支援学級生徒の理解に対する校内研修、8月に個別支援の具体的なあり方についての研修を行っている。西備支援学校や療育支援事業所ててくから講師を招き、より具体的な関わり方について研修を深めている。 教育支援員の配置もあり、特別支援学級の生徒個々の特性に合わせた支援が行われている。 	A

分析・改善方策

・教員は、ICT機器を利用し、生徒にとって視覚的でわかりやすい授業実践に心がけている。授業での学習を家庭での学習に結びつけ、家庭学習の時間確保と内容の充実に向けた取組を展開する必要がある。

・生徒全体として、自己肯定感が高く、学校生活での満足度も高い数値で安定している。しかし、いじめ等の事例については今後も継続して欲しい。特に、「グッドビヘイビアチケット」は、生徒の自己肯定感の高まりとともに他者を認め合う風土の構築にもつながっているため、継続した取組としてほしい。

・アンケートや学力調査の結果について定点観測だけでなく、伸び率等の縦断的視点も取り入れて欲しい。また、「楽しい」だけでなく「充実度」からも生徒の幸福度を見る視点も必要である。今までの評価項目の再検討も必要な時期にきているのではないかと。

3 学校・家庭・地域の連携

学校と家庭との連携をより強固なものにしてほしい。学習面では学校と家庭の学習を系統だてて捉えられるように家庭に対して情報発信が必要である。一方で、家庭から学校へ意見が言える「場」を今まで以上に意識的に作ってほしい。

評価が、家庭・地域の人にもわかりやすい提示を心掛けてほしい。

4 学校評価

学校組織が変化しても、評価から見えてきた課題への対応が途切れることなく継続して行うこと、新たな組織として改編することの双方向を大切にしたい。持続発展可能な仕組みとして継続できるように、評価については、行政がオーナーシップを持って行動する側面も必要である。教職員の人事異動前後においても縦断的評価と改善を維持するには設置者のリーダーシップと学校支援の姿勢が特に重要である。各評価項目について真摯な対応がなされている一方で、評価に関わるアンケートや評価自体が教職員の負担にならないようにしてほしい。「働き方改革」が求められているなか、適宜効率化されたい。

学校関係者評価

1 総論

自己評価は妥当である。来年度に生かせる分析・改善方策になるよう、具体的で焦点化された対応策を求めたい。

2 課題への対応

教育課題を的確に捉え前向きに取り組んでいる姿勢は評価に値する。一連の取り組み事例については今後も継続して欲しい。特に、「グッドビヘイビアチケット」は、生徒の自己肯定感の高まりとともに他者を認め合う風土の構築にもつながっているため、継続した取組としてほしい。

アンケートや学力調査の結果について定点観測だけでなく、伸び率等の縦断的視点も取り入れて欲しい。また、「楽しい」だけでなく「充実度」からも生徒の幸福度を見る視点も必要である。今までの評価項目の再検討も必要な時期にきているのではないかと。

3 学校・家庭・地域の連携

学校と家庭との連携をより強固なものにしてほしい。学習面では学校と家庭の学習を系統だてて捉えられるように家庭に対して情報発信が必要である。一方で、家庭から学校へ意見が言える「場」を今まで以上に意識的に作ってほしい。

評価が、家庭・地域の人にもわかりやすい提示を心掛けてほしい。

4 学校評価

学校組織が変化しても、評価から見えてきた課題への対応が途切れることなく継続して行うこと、新たな組織として改編することの双方向を大切にしたい。持続発展可能な仕組みとして継続できるように、評価については、行政がオーナーシップを持って行動する側面も必要である。教職員の人事異動前後においても縦断的評価と改善を維持するには設置者のリーダーシップと学校支援の姿勢が特に重要である。各評価項目について真摯な対応がなされている一方で、評価に関わるアンケートや評価自体が教職員の負担にならないようにしてほしい。「働き方改革」が求められているなか、適宜効率化されたい。

↓

来年度の重点・方針

- 1 確かな学力を身につける。
 - ①学力の向上を目指した授業改善を図る。
 - ・主体的・対話的で深い学びの実現を目指し、授業改善に取り組む。
 - ・ペアやグループ活動による学び合い学習を取り入れ、相互に関わり合える場面を設定し、協働して課題を解決することで活用力を育む。
 - ・各教科の授業で、電子黒板や教材提示装置等のICT機器や指導用デジタル教科書を効果的に活用できるように研修を行う。
 - ②基礎基本の徹底と学習習慣の確立を図る。
 - ・帰りの会でのドリル学習(夕学)を充実する。
 - ・長期休業中やテスト週間、部活動がない日の放課後に個別指導の機会を設定する。
 - ・「生活ノート(矢掛版)」を活用し、帰りの会で課題と必要時間を確認するとともに自主学習を含めた家庭学習の計画を立てることを通して、自己管理能力を育む。
 - ・家庭と協力して、年3回の矢掛町家庭学習強化期間の取組を充実させる。また、保護者が適切に支援できるように、学校だよりや学年だよりで啓発していく。
 - ③総合的な学習の時間を系統性のある取組にする。
 - ・地域の資源を活用する中で、1学年は地域を学ぶ、2学年は地域で学ぶ、3学年は地域・社会に貢献するという観点で、系統的に取り組む。
- 2 支え合える、認め合える、繋がり合える集団づくりをする。
 - ①良好な学級の雰囲気づくりに努め、生徒の自己肯定感を高める。
 - ・学び合い学習を通して、聴き合える、伝え合える、繋がり合える学級づくりに取り組む。
 - ・学校行事、学年行事、学級活動などを通して、認め合える、繋がり合える学級づくりに取り組む。
 - ・「Good Behavior」チケットの配付や期待される行動の明示など、SWPBIS(School-Wide Positive Behavioral Interventions and Supports:学校全体における積極的行動介入および支援)の取組を推進し、生徒の自己肯定感を高めるとともに、生徒や保護者との信頼関係を構築する。
 - ・年3回のQUアンケートを活用し、学級集団の状態や変容を把握する。
 - ②社会的実践力が身につくようにする。
 - ・生徒会や専門委員会の活動を通して、矢掛中学校三つの誇りが実践できるようにする。
 - ・情報モラル教育を充実させ、情報端末(スマートフォンも含む)を、正しい判断力を持って使えるようにする。
 - ・「地域を支える学校」として、生徒が主体的に地域の活動に参加するよう支援し、参加の状況を積極的に公開する。
- 3 学校生活に適応できるように個別的な支援を充実する。
 - ①学校に適応しにくい生徒への支援を充実する。
 - ・不登校の未然防止に向けて、出前授業や体験授業、相互授業参観など、小・中連携の効果的な取組を行う。
 - ・スクールカウンセラーや外部の関係機関との連携を一層密にする。必要に応じて、ケース会議を行い、情報共有と支援の方向性について協議する。
 - ・生徒指導上の課題の未然防止に向けて、学校アドバイザーの活用や関係機関との連携を密にする。防犯教室や講演会を行い、規律のある落ち着いた学校づくりに取り組む。
 - ・学校生活アンケートを原則として毎月行ったり、生活ノートや班長会を活用して生徒に関する情報を集めたりすることで、いじめや不応の早期発見、早期対応に努める。
 - ②特別支援教育の充実を図る。
 - ・特別支援教育コーディネーターを中心に、教職員や支援員が密に情報を共有し、個別の支援を充実させる。
 - ・関係機関や専門家、保護者と連携し、個別支援を充実させる。
 - ・特別支援教育に関する校内研修を経験年数研修と連動させて計画的に行う。